

# 北海道大会に参加するチームの<sup>じゅんしゆ</sup>遵守すべき事項 (2025 年度版)

(各支部へ：本文は必ず全道大会代表チームに渡し、周知を図って下さい。)

一般社団法人 北海道軟式野球連盟

## I. 監督会議（学童・少年は監督・主将会議）について（開催の場合）

- 1 北海道大会に出場する代表チームは、監督会議に監督及び主将が必ず出席すること。ただし、一般チームにおいては、監督又は主将のどちらかが都合により出席出来ない場合は代理が認められる。（この場合、監督及び主将両方の代理は認められない）少年部及び学童部並びに女子のチームについては、監督が都合より出席できない場合は、事前に登録しているコーチが代理で出席することが出来る。また、主将が特別な事由で出席できない場合はこの限りではない。なお、監督会議に出席しないチームは、原則として棄権とみなします。  
（全国大会では、一般チームは監督または主将のどちらかの1名の出席でよい。）  
監督会議への出席者は、試合で使用するユニフォームを必ず着用すること。なお、監督会議で説明又は決められた事項は、必ずチーム全員への周知を徹底すること

## II. 開会式について（開催の場合）

- 1 チームは、選手集合同所で支部代表旗をセットし、入場の際には、プラカードを先頭に、支部代表旗を持った主将（前年度優勝及び準優勝支部は、優勝旗及び準優勝杯を先に）に続き、背の低い順に1列若しくは2列で行進すること。（少年・学童・女子も同様）（具体的には開催地の指示に従うこと。ちなみに全国大会では2列になる。）
- 2 開会式には、全員ユニフォーム並びにスパイクで入場行進をすること。ただし、球場の芝保護の為にアップシューズ使用も認める。（この場合は通常の運動靴等は不可）また、ウインドブレーカー等の着用は禁止する。なお、高円宮賜杯学童（マック）大会におけるドナルド・マクドナルド・ハウス財団支援に係る「スマイルソックス」の着用チームの入場行進は認める。
- 3 開会式には、登録選手全員の参加が望ましいが、最低でも10名以上参加すること。ただし、1回戦不戦勝のチームは2人以上でも可。ただし、前年度優勝及び準優勝支部はプラカードの保持、優勝旗（準）返還などを考慮して3名以上でなければならない。  
（全国大会では不戦勝のチームでも10名以上）
- 4 開会式は、大会の意義あるセレモニーであり、手を大きく振って「照れず」に元気よく行進すること。（事前にチームで行進の練習を行うことが望ましい。）
- 5 上記のほか、体育館等の「室内」で開催される場合は、開催地支部の指示に従うこと。  
※一部（学童・少年大会等）を除き、原則「監督会議及び開会式」は開催しないが、開催する場合や他の方法（開始式や始球式など）においては、開催支部の指示に従うこと。

## III. 応援方法について \*競技者必携 P 8 (マナーを守った節度ある応援について)

大会における鳴り物を使った応援については、「相手投手が投球姿勢に入った時点（投手板に触れて投球位置についた時）で控える」など常識の範囲で節度ある応援に努めるよう周知徹底すること。（一般も含め全ての大会において徹底）

#### IV. 交通安全について

移動手段として自家用車等を利用する場合は、交通安全に心掛け、時間的な余裕をもって行動すること。

#### V. 傷害保険への加入について

国スポでは、大会実施要項により「傷害保険」への加入が義務付けられているが、他の全道大会においても、選手の怪我など、不測の事態に適切に対応できるよう、チームの責任において「損害保険」に加入するように努めること。（この保険は、チームの1年間の活動における事故・損害などの補償はもとより、他の損害を補償する「賠償責任保険」など内容も充実している。）

なお、支部大会に関しての加入の義務付けや任意の判断は、所属支部に委ねることにします。

#### 〔競技運営に関する取り決め事項〕

- 1 大会期間中に監督または主将が欠場する場合、代理監督（主将）を指名しなければならない。この場合、打順表交換時に大会本部に申告する。（2024年度から左袖の布は廃止にしました。）
- 2 開会式直後の第1試合のチームは、開会式前に用具・装具をダッグアウトに入れ、開会式予定時刻の30分前に、大会本部が用意した打順表【当日の試合に出場する者のみを記入すること。⇒ただし、全道大会における特別な運用で、全国大会では全員記入が基本となっているので注意すること。また、選手が当日遅れて到着しても未記入の場合は出場できないので注意すること。打順表は1セット6枚複写のため、強めに記入する。】を主将が大会本部に提出し、球審立会いのもとに攻守を決定する。攻守決定後、速やかに後攻チームからシートノックに入る（時間は5分間）。なお、ベンチ前でのサイドノックは認められるようになりました。（2024年度修正）
- 3 開会式直後の他球場での第1試合は、会場到着後直ちに攻守を決定し、試合開始予定時間を考慮しながらシートノックに入る。
- 4 各球場は、第1試合の試合開始予定時刻の90分前に開門する。
- 5 ベンチは、組合せ番号の若い方を一塁側とする。但し、1チームが続けて2試合続けて行う場合はベンチの入れ替えをしない。
- 6 チームは試合開始予定時刻の60分前までに必ず球場に到着し、試合に臨む準備を整えること。ただし、当日の試合の進み具合によっては試合開始が早まる場合もあるので、必ず試合の進行状況を確認すること。（会場到着報告と打順表を受け取ること）
- 7 その日の第1試合に出場のチームは、外野に限り練習に使用してもよい。その際、アップ用の服装でもよいが、打順表提出時には、全員ユニフォームに着替えること。トレーニング・アップ用補助具は、打順表提出まで使用することができる。
- 8 第2日目以降の第1試合に出場のチームは、前述2と同様に試合開始予定時刻の30分前までに打順表提出、攻守を決定し、直ちにシートノックに入る。態勢が整っているときは、試合開始予定時刻前でも試合を開始する。
- 9 第2試合以降は、9回戦では前の試合の5回終了時に、7回戦では4回終了時に、6回戦では3回終了時に打順表を提出し、攻守を決定する。（それぞれの回に入ったら提出など、速やかな対

応を心がけて下さい。) 前の試合の終了前にグラウンド入口に待機して、試合終了の挨拶中にグラウンドへ入り、用具・装具をダッグアウトの外野側に置き、試合開始予定時刻に関係なく、シートノックに入り試合を開始する。

【打順表の記載注意】少年大会や学童大会において、女子選手がいる場合及び4年生以下の選手がいる場合は、打順表の背番号に判るように印(女子選手○と4年生以下△)を付けて下さい。

- ※学童部(女子含む)の場合、健康を留意し、全国大会及び北海道大会では6回戦若しくは1時間30分の時間制限が設けられました。  
なお、試合中プレーヤー等の負傷手当のための遅延は試合時間に算入しません。

- 10 シートノックは5分間とする。ノッカーも選手と同じユニフォームを着用し、ユニフォームを着用していない者はグラウンドに出ることはできない。また、捕手はプロテクター、レガーズ、捕手用ヘルメット、ファウルカップを必ず着用すること。

- ※ シートノック・サイドノック時の補助員は、安全上、全員ヘルメットを着用すること。(一般も同様です。未着用が散見されるので注意すること)  
シートノックでダートサークル内に留まる、あるいは出入りする補助員、サイドノックは全員ヘルメットを着用する。サイドノックでの外野方向へ打つことは認めない。

少年・学童・女子では、登録されているコーチ(背番号28・29)が補助員として携わることを認める。補助員に入るコーチもヘルメットを着用すること。また、試合開始までの間はコーチ1人のブルペン捕手を認める。(フェイスマスク着用)

なお、別のコーチ等が外野手にノックすることは、可能になりました。

- 11 大会運営上、シートノックを行わずに試合を開始することもある。この場合は、攻守決定の際に知らせる。
- 12 次の試合に向けたグラウンド整備は、シートノック終了後に行う。
- 13 第2試合以降は、試合開始予定時刻前でも、前の試合が終了した後20分を目安に次の試合を開始する。
- 14 次の試合の先発バッテリーは、攻守決定後、球場内のブルペンを使用することできる。ただし、当該試合に支障のない状況での使用に限る(試合中のベンチ内監督に確認する)。捕手は試合と同様の用具等を着用すること。
- 15 試合に出場する捕手は、プロテクター・レガース・フェイスマスク(スロートガード付)・捕手用ヘルメットのほか、ファウルカップを着用すること。また、投球練習時においても同様とする。ただし、捕手に求められる用具を全て着用できない場合は立っての捕球とする。(2023年度修正)  
なお、捕手・審判員用マスクは「J S B B」マークのほかに「S G」マークのついた連盟公認のものを使用しなければならない。
- 16 ベースコーチは、必ずヘルメットを着用すること。また、ベースコーチのウインドブレーカーの着用については雨天又は寒冷時に限り認める。
- 17 サングラスは、投手も含めた全てのプレーヤーが大会本部の承認なしに使用できる。但し、投手のミラーレンズサングラスは使用できない。なお、少年及び学童並びに女子の大会においては、

監督・コーチの使用は認めない。

- 18 球場内での打撃練習は外野芝生部分でのトスバッティングのみ認め、フリー及びハーフバッティングを禁止するとともに、サンドボールなどの用具使用は認めない。
- 19 ベンチ内での電子機器類（携帯電話、パソコン等）及び携帯マイクの使用並びにカメラ等による撮影行為を禁ずるが、電子スコア記録用として1台の使用は認めます。また、指示用のメガホンはベンチ内に限り1個の使用を認めます。
- 20 攻守交替時に、最後のボール保持者は、投手板にボールを置いてベンチに戻ることに。雨天時は相手投手又は野手、ベースコーチに渡すこと。
- 21 雨天の場合でも試合を行うことがある。また、午前中見合わせて午後から行う場合もあるので、大会本部からの連絡に注意すること。なお、当日試合不可能な場合は大会本部から連絡する。
- 22 ベンチに入れる人員は、「一般」は、登録されユニフォームを着用した監督30番を含む選手25名以内（但し、国スポ及びマスターズは別に定める）とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー等（有資格者）各1名とする。  
「少年部・学童部・女子」は、登録されユニフォームを着用した監督30番、コーチ29番・28番及び選手25名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各1名とし、この内1名は公認学童コーチ等の有資格者であること。（2024年度修正）なお、監督、コーチは20歳以上でなければならない。また、熱中症対策として保護者2名以内をベンチに入れることができる。【この適用については、大会本部が判断し、所定のビブス着用をお願いする】また、「全日本シニア」は、登録されユニフォームを着用した監督30番を含む選手25名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各1名とする。ただし、監督、マネージャー、スコアラーが選手を兼ねる場合には、選手登録25名以内とする。
- 23 少年部、学童部、女子でも監督に限り「一般」と同様、グラウンドに出て指示などをすることができる。また、試合中にベンチに入ることが許されたメンバーであれば、ベンチ内においては誰がサインを出してもよい。
- 24 夏季の学童大会等では、炎天下の中、守備時間が長い場合（概ね20分）に健康維持を考慮し、審判員の判断で給水タイムを設けることができる。（この場合において試合時間には含めない。）なお、各チームにおいては熱中症対策ガイドライン等を参照してください。
- 25 試合中の禁止事項【必携P52～53 抜粋】
  - ① マスコットバットを次打者席に持ち込むことはよいが、プレイに支障をきたさないよう注意し、適切な処置をすること。なお、競技場での素振り用パイプ及びリングの使用を禁止する。
  - ② 投手が、負傷で包帯等を巻く必要がある場合は球審に申し出し、承認を得ること。
  - ③ プレーヤーが塁上に腰を下ろすことは禁止する。
  - ④ 競技場内（ベンチ内を含む）では、喫煙及びガム等を噛むことを禁止する。
  - ⑤ 捕手の後方で投球を見たり、素振りや待機することを禁止する。待機場所は次打者席。
  - ⑥ 試合が開始されたら、控え選手は試合に出場する準備をしている者のほかは、ベンチ内にいなければならない。なお、2024年度から次のことについては認める。(1)攻守交代時にファウルグラウンドで外野方向へのランニングをすること。(2)攻守交代時に自チームの練習をベンチ前で見守ること。ただし、球審の「プレイ」宣告までにはベンチに戻ることに。(3)攻守交代時に外野手とキャッチボールをすること。
  - ⑦ 次打者席では、投手が準備投球及び投球姿勢に入ったら素振りをしてはならない。投手も必ず次打者席に入ること。（5.10k【注1】）
  - ⑧ トラブルの際、審判員や相手側プレーヤーへの暴力行為は厳禁する。万一このような事態が生じ

た場合は、退場を命ずるほか、以降の出場停止やチームへのペナルティを科す。

- ⑨ 選手や審判員に対する聞き苦しい「ヤジ」は厳禁する。また、スタンドからの応援団の「ヤジ」及び目に余る行為はチームの責任とする。【必携 P7：『野球にはヤジは必要ありません』・必携 P8：『マナーを守った節度ある応援について』】

26 試合のスピード化に関する事項【必携 P54～56 抜粋】

- ① 監督、コーチのマウンドへの行き帰りは、小走りでスピーディーに行う。
- ② 代打または代走の通告は、氏名と共に「代打者」又は「代走者」の背番号を球審に見せその旨を告げること。
- ③ 投手と捕手について、無用なけん制が度を過ぎると審判員が判断したら、遅延行為として投手にボークを課することがある。
- ④ 投手は捕手、その他の内野手または審判員からボールを受けた後、走者がいない場合には 12 秒以内、走者がいる場合は 20 秒以内に投球動作を開始しなければならない。これに違反した場合は直ちに「タイム」が宣告され、「ボール」がカウントされる。
  - ・計時は、投手がボールを所持し、打者がバッターボックスに入り投手に面したときに始まり、投手が投球動作を開始したときに終わる。
  - ・20 秒ルールの適用は、「タイム」を宣告してボールデッドとする。「タイム」の宣告にも関わらず投手が投球した以後のプレイは無効とする。
  - なお、学童・少年・女子大会は、投球数に入れる。
- ⑤ 内野手間のボール回しは 1 回りとする。(状況によって中止することもある。)
- ⑥ 打者が二塁打を打ち打撃用手袋から走塁用手袋に替える為のタイムをかける行為を禁止する。
- ⑦ 本塁打の走者を迎える場合は、ベンチ前のみとする。
- ⑧ 試合中、スパイクの紐を意図的に結び直すためのタイムは認めない。
- ⑨ タイムは、プレーヤーの要求したときでなく、審判員が宣言したときである。

27 バッテースボックスルールを適用する。(5.04 (4)) (必携 P82 アマチュア内規②)

アマチュア内規例外規定に該当しない場合は、球審は、その試合で 2 度目までの違反に対して警告を与え、3 度目からは投手の投球を待たずにストライクを宣告する。この場合はボールデッドである。

28 マナーや用具・装具に関する事項【必携 P57～60 抜粋】

- ① 監督が季節や天候により、グラウンドコート着用している場合にアピールや選手交代などをするときは、その身分を明らかにする(背番号の確認)ために、コートを脱いで申し出ること。
- ② 試合に出場する捕手は、安全の為プロテクター、レガーズ、フェイスマスク(スロートガード付)、捕手用ヘルメット、ファウルカップ(女子は任意)を着用すること。なお、捕手用ヘルメットとフェイスマスクの一体製品は使用を禁止する。また、打者・次打者・走者及びベースコーチは必ずヘルメットを着用すること。(この場合、ベースコーチを除き、いずれも公認された両側か片側にイヤフラップの付いたもの)
- ③ 用具・装具の点検時に、不良品を発見した場合は、試合終了時まで本部預かりとする。
- ④ 学童部は金属製金具のついたスパイクを使用することはできない。
- ⑤ 少年部・学童部・女子の監督・コーチ及び選手について、ストレートパンツは認めない。
- ⑥ アームスリーブの着用は、野手は色の規制はなく片袖のみでも可能だが、投手はアンダーシャツと同色で、両袖とする。
- ⑦ ユニフォームの上着はきちんとズボンに入れること。
- ⑧ 学童部では、一般用バットのうち打球部にウレタンスポンジ等の素材の弾性体を取り付けたバットの使用を禁止する。(2025 年より)

29 その他

- ① 1 日 2 試合(ダブルヘッダー)まで行うことができる。継続して行う場合は、前の試合終了後、30 分以内を目安に開始する。

- ② 試合中に雷が発生した場合は、状況を判断し、試合を中断して全員安全な場所に避難させ、气象台等の状況を掌握し、その後の処置を行う。
- ③ 試合中、プレーヤーの人命にかかわるような事態が発生した場合、人命尊重を第一に、プレイの進行中であっても、審判員の判断でタイムを宣言することができる。この際、その宣告によってボールデッドとならなかったらプレイにどのようなになったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。
- ④ 打者が頭部（胸部など）にヒットバイピッチ（死球）を受けた時はその程度を問わず臨時代走の処置を行う。また、塁上の走者が負傷し、一時走者を代えないと中断が長引くと判断したときは臨時代走の措置を行うことができる。（打球、送球の場合も同様）
- ⑤ 少年部・学童部（女子も含む）チームの試合後の大会本部への挨拶は不要です。（応援団への挨拶は奨励します。）

## 〔競技に関する特別規則〕

### 1 正式試合

- (ア) 「一般」は、9 回戦（マスターズと全日本シニアは 7 回戦）また「少年部（女子含む）」は 7 回戦とし、「学童部（女子含む）」は 6 回戦（4 年生以下の大会は 5 回戦）とする。
- (イ) 正式試合（降雨・日没コールドゲーム）になる回数は、9 回戦の場合 7 回とし、7 回戦の場合は 5 回とする。  
 ※ 6 回戦の場合において、試合開始以降 1 時間 30 分経過後の均等回完了をもってゲームは終了する。この場合のゲームは、5 回及び制限時間経過のいずれか先に到達した方で試合を決する。
- (ウ) 得点差によるコールドゲーム（決勝戦も適用）は、9 回戦の場合は、5 回以降 10 点差、7 回以降 7 点差とし、7 回戦および「少年部」・「学童部」・「女子」は、5 回終了時以降 7 点差とする。（全国大会では、一般の場合「9 回戦」の全て 7 回以降 7 点差で、全日本シニアに限り 5 回以降 7 点差とする。）

### 2 延長戦

- ① 「一般（天皇杯・国スポは除く）」は、9 回を終了して同点の場合は、最長 12 回まで延長戦を  
 続け、同点の場合は 13 回からタイブレーク方式【無死 1・2 塁、継続打順】に入る。この場合、勝敗が決するまでタイブレーク方式を続ける。ただし、試合開始後、3 時間を経過した場合は、新しい延長イニングに入らず、直ちにタイブレーク方式を行う。  
 なお、天皇杯及び国スポは試合開始後 3 時間を経過するまで延長イニングを行う。
- ② 東日本大会は、9 回を終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行う。（2025 年度修正）
- ③ マスターズ及び全日本シニアは、7 回を終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行う。なお、試合開始後、2 時間 30 分を経過した場合は、新しいイニングに入らず、直ちにタイブレーク方式を行う。
- ④ 「少年部（女子含む）」は、7 回終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行い、2 イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。ただし、決勝戦の場合においては、投手の投球制限を遵守の上、勝敗が決するまでタイブレーク方式を行う。  
 また、健康維持を考慮し、試合開始後 2 時間 30 分を経過した場合は、新しいイニングに入らず、均等回の得点をもって勝敗を決する。なお、同点の場合は抽選で勝敗を決する。
- ⑤ 「学童部（女子含む）」は、6 回を終了又は試合開始後 1 時間 30 分経過後の均等回完了時に同点の場合は直ちにタイブレーク方式を行い、2 イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。

注 1) 少年部（女子含む）に関して“試合開始後、「2 時間 30 分及び均等回の得点を持って勝敗を決する」は道連の規定として運用します。

全国大会での 2 時間 30 分の制限は 5 回終了後、2 時間 30 分を経過した場合と解釈。

注 2) 「抽選で勝敗を決する場合」は道大会及び地区大会等のみの適用。

3 「少年部・学童部・女子」の投球制限について

投手の投球制限については、肘・肩の障害防止を考慮し、投球数を次の通り制限する。

学童部は1日70球以内（4年生以下60球以内）、少年部は100球以内（1週間では350球以内）とする。ただし、試合中規定投球数に達した場合は、その打者の打撃を完了するまで投球できる。

12秒、20秒ルール適用、タイム後の投球は投球数にカウントする。

4 特別継続試合の再開

- ・もとの中断された回(個所)から再開します。
- ・両チームの出場者と打順表は、試合中断時と全く同一でなければならない。
- ・中断前の試合に提出されたオーダーに記載されていない選手や途中交代し、試合から退いた選手は、再開された試合には出場できません。
- ・中断、再開の際は、試合の終了及び開始と同様に挨拶させます。
- ・グラウンドを変えて再開する時及び翌日特別継続試合として行う時は、原則としてシートノックを行います。
- ・特別継続試合は、全ての事項についてもとの試合を引き継ぐ。(試合時間、投球数、タイムの回数制限、警告回数等)
- ・学童部や少年部における特別継続試合の投球数と試合時間の取り扱いは、元の試合で投じた球数を引き継ぎ、残りの球数と残りの試合時間で行われます。但し、同じ日に更に試合ある場合は、1日の投球制限を超えない範囲で登板できる。

5 全軟連（道軟連）が主催する大会においては、『指名打者ルール』を使用することができる。

また、学童・少年（女子共）には二刀流選手を採用しない。（2024年度修正）

6 抗議権を有する者は、監督か当該プレーヤーのいずれか1名とする。（2024年度修正）

7 規則 5.10 d 【原注】の「同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない。」は適用しない。

8 スピード化を図るため、プレーヤーが負傷などで治療が長引く場合は、相手チームに伝え、試合に出ている9人の中から代走（＝コーティシーランナー、打順の前位の者、ただし投手を除く。）を認めて試合を進行させる。

9 監督またはコーチが投手の所へ行く回数の制限

監督またはコーチ（少年部・学童部は監督に限る）が、1試合に投手の所へ行ける回数は3回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）は、1イニングに1回行くことができる。ただし、投手交代の場合は回数に含まない。

10 守備側のタイムの回数制限

- ・捕手または内野手が、1試合に投手の所へ行ける回数を3回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）となった場合は、1イニングに1回行くことができる。野手（捕手も含む）が投手の所へ行った場合、そこに監督またはコーチ等が行けば、双方1回として数える。逆の場合も同様とするが、投手交代の場合は、監督またはコーチのみ回数には含まない。
- ・監督またはコーチ等がプレーヤーとして出場している場合は、投手のところに行けば野手としての1度と数えるが、協議があまり長引けば、監督またはコーチ等が投手の所へ1度行ったこととし、通告する。
- ・攻撃側のタイム中に守備側は指示を与えることができるが、攻撃側のタイムより長引けば、守備側の1回とカウントされる。

- ・投手交代の場合、投手と捕手の打ち合わせ(サインの確認)のために、準備投球の前あるいは後に少しでも会話することは、捕手または内野手の回数に含まない。

#### 11 攻撃側のタイムの回数制限

- ・攻撃側のタイムは、1試合に3回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）は、1イニングに1回とする。
- ・守備側のタイム中に攻撃側は指示を与えることができるが、守備側のタイムより長引けば、攻撃側の1回とカウントされる。

#### 12 タイムは1分以内を限度とする。

#### 13 競技者のマナーに関する事項 【必携 P57 抜粋】

マナーアップとフェアプレイの両面から、次のような行為を禁止する。

- ・捕手が投球を受けたとき意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為
- ・捕手が自分でストライク・ボールを判定するかのように、球審がコールする前にすぐミットを動かし返球態勢に入る行為
- ・球審のボール宣告にあたかも抗議するかのように、しばらくミットをその場に置いておく行為
- ・打者が投げ終わった球種を次打者他に知らせることを禁止する。
- ・打者がヒジ当てを利用してのヒット・バイ・ピッチ（死球）狙いの行為
- ・打者がインコースの投球を避ける動きをしながら当たりにゆく行為
- ・プレイ中みだりにベンチを出る行為
- ・野手が走者の視界を遮る行為（6.01h【2】）
  - \*走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
  - \*野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為
  - \*相手選手を威嚇する行為、プレイを利用して相手選手を欺く行為
- ・投手が投手板に触れて投球位置についたら投手の動揺を誘うような大声を発しない。また学童部・少年部の試合においては、ベンチ内の大人がいかなる場面であろうとも、選手を委縮させるような言動は厳禁とする。
- ・審判の代わりに選手またはベースコーチが、判定とコールを行う行為は禁止する。（セルフジャッジの禁止）

#### 14 規則適用上の解釈 【必携 P61～77】

- ・投手の投球当時とは、投手が投球動作を開始した時をいう。  
セットポジションの際のストレッチは投球動作とはみなさない。
- ・悪送球が野手の手を離れたときの走者の位置について（規則 5.06b【4】G 関連）
- ・1アウト走者一・二塁で、二塁走者がけん制で二・三塁間においてランダンプレイになった。その間、一塁走者は二塁に達していた。その後、ランダンプレイにおいて二塁手が三塁に悪送球してボールデットの箇所に入ってしまった。悪送球が野手の手から離れたとき、二・三塁間には二人の走者がいた。このような場合は「各走者がその時に位置していたところ」との解釈から、一塁走者には二塁から2個の塁、すなわち本塁までの進塁を認める。
- ・対象走者以外に対するけん制球について（規則 6.02a【4】【8】）
- ・1アウト走者二・三塁、野手は前進守備、投手は投手板上から三塁にけん制球を投げた。三塁手は、一歩前に出てその送球を捕って素早く二塁に送球し、二塁走者をアウトにした。三塁手に三塁走者をアウトにしようとする行為も見られず、ましてや、三塁手も一歩前に出たということで「ボーク」が宣告される。

#### 15 試合中、次のイニングに引き続き投げる投手は、ベンチ前のキャッチボールは禁止するが、ベンチ外野側角からポール方向のファウルテリトリーでの軽いキャッチボールは認める。また、ブルペンでのキャッチボールは2組4名以内を認める。



- 16 全道大会優勝若しくは準優勝し、北海道代表となったチームは、ユニフォームの左袖に「北海道」（ローマ字も可）のマークを入れることになることから、支部代表チームは、予めマークを入れておくこと。  
また、本国スポに出場するチームは胸マークを「北海道」（ローマ字も可）としなければならない。
- 17 背番号は、監督 30 番、コーチ 29 番と 28 番、主将を 10 番とし、選手は 0 番から 99 番とする。
- 18 既に試合に出場している投手がイニングの初めにファウルラインを超えてしまえば」とあるのを「投球練習するために投手板に位置してしまえば」に読み替える【5. 10i 関係】
- 19 監督又はコーチがマウンドに行く回数のカウントの仕方は、①監督又はコーチがファウルラインを越えて投手のもと（マウンド）へ行った場合は必ず 1 回に数える（ただし投手交代の場合を除く）、②球審（審判員）は、監督又はコーチに投手のもと（マウンド）へ行った回数を知らせる場合に限る。【5. 10l 関連】
- 20 故意四球は守備側の監督の宣言によって成立し、ボールデッドで行う。
- 21 支部代表チームをはじめ、道連登録全チームは、道連及び支部におけるコンプライアンス指針等の主旨を充分理解し、健全で楽しい軟式野球の普及に努めること。
- 22 全道大会申込書については、競技者登録システムを活用したデーター提出とし、この場合、「支部長印」は不要とします。ただし、支部および支部長名は記載して下さい。  
なお、大会参加料は事前に道連指定口座に送金して下さい。詳しくは、各大会要項等を参照下さい。（2024 年度改正）
- 23 全ての一般大会では、登録者の身分を証明する写しの提出（道連事務局宛）が義務付けられているので注意すること。（登録者順に列記してください。）
- 24 国スポのチーム編成要件は、他の一般大会同様に道内に居住又は勤務する者で編成されたチームに緩和する。（日本スポーツマスターズも同様）  
ただし、補強等の取り扱いは従来通りで北海道大会（全軟連ではブロック大会に位置付けられている。）に出場したメンバーを変更して本大会（全国大会）に出場することはできない。
- 25 2025 年度からは B・C クラスの全国大会（東日本 1・2 部、高松 1・2 部、全日本シニア）は監督会議及び開会式を実施しない方向。